
それ

凧沚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それ

【Nコード】
N6667C

【作者名】
風止

【あらすじ】
「カウンターに来て下さい」それは助けを求めるSOSとは限らない。

第1話：カウンターに来て下さい（前書き）

注意：そんなに対したこと無いですが、一応流血します。

第1話：カウンターに来て下さい

「いらつしゃいませ」

「ありがとうございます」注：繰り返し

毎日愛想笑い振りまいて、喉が枯れるまで声出して、俺何やってんだろう？

全国色々な場所で見かける某コンビニ。

その中の一つ、俺は安い時給で必死に働いていた。

夕方6時から、夜11時までの5時間。がんもどきのように膨れたオーナーか、能面でのつぺりとした顔立ちの女性アルバイト北川さん。

そのどちらかと一緒に仕事をする。

オーナーと仕事をするよりは、北川さんと仕事をする方が楽しかった。

今日は北川さんとで、二人で話をしたりしながら仕事をしていた。

「あのお客さん絶対カツラだよ。何か浮いてるもん」

「ありや駄目ですね。タケコプター付けたら、カツラだけ先行っちゃいますね」

そんな下らない話をしていると、ごみを片付ける時間になったので、取り掛かることにした。

いつものように北川さんにレジを頼み、裏にあるごみから順に片付ける作業にはいった。

店内の客が少なくなったときを狙って、裏のごみを取りに行った。裏には監視カメラの映像がモニター画面に映し出されていた。

4分割された画面は、レジ上の2台と、レジとは反対側の隅に1台ずつ、計4台あり、音声も録音していた。

机の上にはその他に、パソコンが置いてあり、オーナーはパソコンで仕事をする方が多かった。

「カウンターに来て下さい」

女性のデジタルな声が耳に響いた。

モニターの監視カメラの映像を見ると、北川さんが監視カメラに向かって手を振っていた。

レジに付いているタッチパネル式の画面には、商品が映し出される他にはたくさん機能が付いている。

その中の

「呼び出し」ボタンを押すと、裏にいる店員に今のような声が届けられる。

「レジが混雑したり、分からないことがあったら、このボタンを押して読んでくれていいから」入った頃そう言われたのを覚えている。燃えるごみ、燃えないごみの二つをごみ箱から袋ごと取り外し、新しい袋に付け替えた。

「カウンターに来て下さい」

モニターに目をやると客はおらず、北川さんも普通に立っていた。分からないことでもあるのかな？そう思いごみの袋を両手に持ち立ち上がると、また声が聞こえた。

「カウンターに来て下さい」

どうしたんだろう？モニターを見ると北川さんは外を見つめたまま呼び出しボタンを押していた。

そのうちボタンを押す指はだんだん早くなり、声も狂ったように叫び出した。

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

ピンポンと客が店に入った音と共に北川さんが動き出した。

レジから少しずつ後退りはじめ、何かに怯えているように見えた。

後ろに後ろにと下がっていく北川さんは監視カメラに写らなくな
った。

そして…。

「きゃあああああ！！」

モニターからと実際に聞こえる声が二重になり俺の鼓膜に響いた。
何が起こったのか考えたくなかった。

胸が苦しくなり呼吸が早くなるのが分かった。

うまく唾も飲み込めなくて、口の端からだらだらと零していた。
寒くないのに体が震える。怖くて堪らない。穴という穴から水分
汗、涙、鼻水、涎が一斉に。拭うに拭えない。

「カウンターに来て下さい」

誰かが押している。

俺がいることを知っている。怖くてモニターは見れなかった。

「カウンターに来て下さい」

また呼び出された。

恐る恐るモニターに目をやると、レジ周りが血で赤く染まってい
るのが分かる。

ギィッと裏のドアが開いた。突然の出来事に俺は近くのデッキブ
ラシを手を取った。

第2話：思考と視界と死

少し開いたドアは、押せば開く軽いドアで、風が強い日や、誰かを通っただけでも揺れるようなドアだった。

「中野くん」

俺の名前に聞き覚えのある声。

「北川さん？」

持っていたデッキブラシでドアを押すと、そこには北川さんが血だらけで立っていた。

「だ、大丈夫ですか？」

デッキブラシを置いて駆け寄ったのが失敗だった。

よく見ると北川さんの右手には血で染まったナイフが見え、左手には女の人が襟元を掴まれ、血だらけでぐったりとしていた。

俺が全てを理解したと確信したのだろう。

持っていたナイフが俺の顔面を切り裂いた。

頭から左目に真っ直ぐ振り下ろされたナイフは、俺に致死量の血を確実にさせた。

「うぐがあああああ」

言葉にならない痛み。

両手で押さえるけれど、血は止まらない。視力を失なった目から温かい血と涙が溢れる。

よたついた揚げ句、自分から溢れ出た血で滑ってしりもちを付いてしまった。

北川さんは半笑いで俺に歩み寄ると、ナイフ持ち替えた。

それはめった刺しをイメージさせる持ちかたで、北川さんは腕を持ち上げた。

「止めて!!」

俺の声も空しく、抵抗を試みた右手ごと心臓にナイフは突き立て

られた。

「げべうええんうう」

やはり言葉に出来ない。

この痛みは永遠に感じることは出来ないだろう。

俺はそのまま動けなくなった。

頭ごとりと落ちた俺は、その後の北川さんを見続けた。

血だらけになった上着を脱ぎ、いつからしていたのかゴム手袋を取り外し、履いていたスニーカーの底を外し、持って来たのと付け替えた。

そして新しい上着に着替え、窓を開けると、ペットボトルの注ぎ口側を切り取った不思議な形の物を二つ取り出し、上着、ゴム手袋、靴の底、ナイフを二つに平等に詰めるとガムテープで封をした。

窓の外は川になっていた。北川さんは楽しそうに鼻歌を口ずさみながら作業を続けた。

おももろにハンカチを広げ、顔に手をやると、顔にひびが入った。ぼろぼろと零れる能面は、顔にかかった血を吸い取り汚い色になっていた。

あ、意識が無くなる。

自分でも分かる。全てが動かなくなっている体。

俺死ぬんだな。

ハンカチの上に能面を落としていく北川さん。

昔に殺された名も分からないお客さん。

今の息絶えようとしている俺。

最後に北川さんの素顔を見ようと目を凝らしながら俺は息絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667c/>

それ

2010年10月8日15時55分発行